



流れる時間を感じることから、キーワードを見つける

八木 沼 修

Osamu Yaginuma

NO.00113068

車窓から見える景色は、穏やかでやさしい気持ちになれる。雪景色はどんな表情になるのだろう。四季がある日本だからこそ、そんな思いを募らせる。黄金色に実った稲穂が広がる棚田に入った9月某日、晴れ。

「この景色は、日本のふるさとです。誇りに思っているのです」。一望できる小高い山より愛おしい眼差しで景色を眺めながら、私に話しかけてきたのは市の観光課の方だ。東京から新幹線と在来線を乗り継いで2時間半の場所とは思えないほど、のどかで時間が流れる感覚をからだで感じられるような、心地よい風景が広がっていた。耳に届くのは自然の音だけだった。

長野県の飯山を訪れることになったのは、リビングデザインセンターOZONEがコー

やぎぬま・おさむ 1970年北海道生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。

2005年デザイン創造工房「めがね」活動開始。同年TOKYO DESIGNER'S WEEK 2005 プロ展出展、

2006年NAGOYA DESIGNER'S WEEK 2006 プロ展出展。2007年TOKYO DESIGN PREMIO 出展 (ミラノ・サローネ)。

ディネーターとして関わっている伝統工芸を《地域ブランド》として打ち出す新たなプロジェクトに、デザインする側として関わることになったからだ。現地の《つくり手》とパートナーシップを組むための第1回現地視察である。

デザインという言葉が広まり、以前より身近になってきているが、デザイン＝形という偏った風潮も見受けられる。デザインは「カタチ」を意味する言葉だけではないと私は思っている。デザインは「そこにあるものの意味」を表現する一部だ。日常のあたり前の景色、あたり前の生活、あたり前のリズム……。その全てには、必ず何らかの「意味」が存在しているのである。近い距離にありすぎること、日々の暮らしの中では見えなくなっているからこそデザインは「そこにあるものの意味」

を再認識する力ともなりえる。「カタチ」だけでいいならデザインはあえて必要ないとも思う。デザインは見落としがちな《意味》をより強く表現できるのだ。そして見る人・使う人の心に響く。

私はこの「デザイン」の依頼を頂いたときから、デザインは「そこにあるものの意味」を表現することだと関係者へ投げかけてきた。2泊3日の視察は、関係者から街の概要の説明を受けながらいろいろな場所を案内してもらい、直接関わる《つくり手》の方とも接して話を聞くことができた。工房や原材料の畑など、この街の日常を見ることもできた。

こうしてこの街にふれることで、プロジェクトに関わる人々が飯山を愛おしく感じていることを知ることになった。街というのは時間を重ねて「カタチ」にな

っていく。小さな街であろうと、大きな都市であろうと同じである。そして街は時間を映し出す。この街を視察しながら私は、人に愛された街を感じる事ができた。デザインを考えると、時間（とき）の流れからキーワードを見つけることがよくある。この街には 緑が濃い山があり雄大な川があり、春には菜の花が咲き乱れ一面黄色いじゅうたんの風景が広がる。だから、懐かしい景色なのではない。だから、日本のふるさとなのではない。そこに住む人が、この景色を愛しているから残されているという事実があるから、素晴らしいのだ。これこそが、時間（とき）の流れから汲み取れるキーワードだ。私が見た景色を、読んで頂いているあなたにも届けられる《プロジェクト》に育てたいものだ。

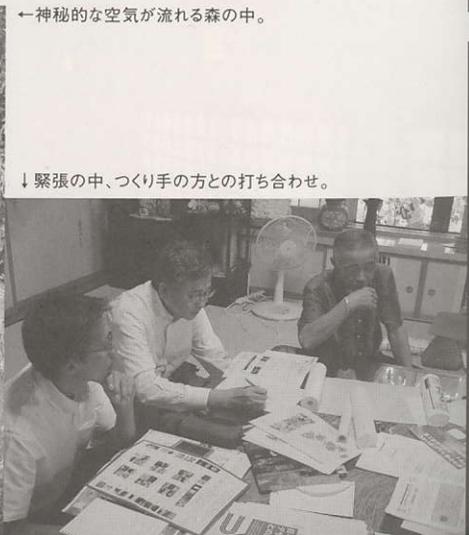
←ここが、春には一面黄色に染まる。



↓原材料を前に、関係者でディスカッション。



←神秘的な空気が流れる森の中。



↓緊張の中、つくり手の方との打ち合わせ。